

【史料紹介】

新島学園高等学校所蔵

「新島八重子夫人の在りし日を偲ぶ」

― 同時代人の文を通して ―

▼新島八重子夫人が昭和七年^{一九三二}に天に召されてから七九年の歳月が経過致しました。

八重子夫人については、会津籠城戦には男勝りの活躍をなされ、後に新島先生の奥方になられた方、という印象くらいしか私たちにありませんでした。

そこで今号では、八重子夫人と同時代を生きた人たちの書かれた八重子夫人に関する文章を載せてみることに致しました。

参考に致しました各文は、八重子夫人の米寿を祝う記念号「同志社校友同窓会報」61号（昭和七年二月十五日発行）と、八重子夫人の御逝去を悼んだ同会報66号「啓弔」（昭和七年七月十五日発行）から引用させていただきます、写真は「同志社山脈」（同編集委員会編）から撮らせていただきました。

各文章は出来る限り原文のままと致しましたので、現在の人たちには読みにくい点があるかと思いますが、お許しください。ただ旧漢字は常用漢字とし、難読文字には読み仮名を付けてみました。英文が一つありますが、そのまま掲載致しました。

これらの文章から、八重子夫人のありし日のお姿を偲んでみたいと思います。

二期生 淡路博和

▼（一）新島八重子刀自と会津籠城

井深梶之助氏

会報61号より

新島八重子刀自^{とじ}は今年米寿に達せられたと申すこと、誠に慶賀の至である。

刀自は旧会津藩土山本覚馬氏の令妹であるが、同氏は旧会津藩中有数の先覚者であつて、当時に在^{あり}ては西洋砲術の達人であつた。又^{また}同氏は維新前より最後迄京都に住居せられたが、或時期に於て、時の良二千石として、令名を轟ろかした榎村府知事の有力なる顧問であり、且失明者でありながら、京都府会議長に選挙せらるゝの榮を荷^{にな}はれた事は、同氏が新島 襄氏の有力なる後援者として、同志社学校の創立に参与せられた事と共に有名な話である。（中略）

是^これから聊か刀自御自身に関する事を述べやうと思ふが、筆者が初めて八重子女史を見たのは、実に今を去る六十五年前、即ち明治元年秋の事であつた。筆者は故意に女子を見た^そと申したが、夫^それは如実に見ただけで、会見して相語つた訳ではないからである。恐らく女史は、その時其場所に筆者が立^{たつ}て居たと云ふ事は、今日が今日迄御存知なからうと思ふが、それは左の如き次第であつた。

時は前述の如く明治元年^{一八六八}辰歳八月廿三日より九月廿三日迄の間の某日である。処は会津若松城の黒金御門と称する天守閣付近の楼門の下である。即ち一ヶ月に亘^{わた}れる籠城中、

会津藩主宰相^{かたもり}容保公が終始居所とせられた場所であるが、某日包圍攻撃が最も猛烈であつて、砲弾が四方八方から飛来爆裂した頃のこと、一人の妙齡の女丈夫が藩公の御前に召されて、敵軍から間断なく城中打込み来る所の砲弾に就て説明を申上たのであつた。

その砲弾は四斤^{よんきん}砲と称して當時に於ては新式の利器であつたのであるが、前述妙齡の女丈夫は敵軍から打込だが、着発しなかつた一弾を携へ来つて、君公の御前に立て、之を分解して、その中に盛られた数多の地紙型の鉄片を取出して、此砲弾が着発すれば、此鉄片が四方に散乱して多大の害を及すものである云々と、極めて冷静に且流暢に説明して、四坐を驚かしたのは、誰あらう、当時芳紀まさに二十三才の八重子女史、即ち本年米寿を迎へられた新島八重子刀自である。

その時、女史の服装は黒羅紗筒袖ダン袋の男装であつて、髪は斬髪であつた。六十五年後の今日之を追憶し来れば、妙齡の一女丈夫が君公の御前に立つて、いとも静かに四斤砲弾丸構成の説明を申上た。その光景は今尚髻^{つんぎ}として、目前に浮び出で、絶間^{たえま}なく頭上にも四方にも爆裂する耳を撃^{つんぎ}くばかりの砲声さへも聞えるやうな心地して、感慨無量なるものがある。

是れは少しく余事に涉^{わた}るかも知れぬが、恐く前述の場合、筆者と同年輩の者で其場に居た者は無からうと思ふから、一言其事情を追加する事に致さう。当時、会津藩に白虎隊

なる者があつて、就中十八九名の者が、飯盛山に自殉した事は有名なる事であるが、筆者は当時数へ年十五才であつたために、白虎隊には編入せられなかつたが、併し強敵軍が城下に迫つた時に君公に扈從して、瀧沢口と云ふ方面に出陣し、而して籠城中は御小姓役を命ぜられ開城の日に至る迄、終始君側に近待した次第であつて、会津籠城中君公の御前に於ける八重子女史の砲弾構造の説明を傍聴目撃したのは、そう云ふ訳であつたのである。

以上

▼(二)「婦徳の鑑」

加藤延年氏

会報61号より

御婦人方にとつては偉い人の妻となることほどむづかしいことはありません。夫が偉ければ偉いだけ、其妻の責任は重くなります。夫の人格が高ければ高いだけ其妻は見劣りがします。ソクラテスが偉かつただけサンテツベの評判はよくありませんでした。禹は治水の事業に熱中し家門を過ぎて入る暇が無かつたと申しますから、とても夫人などにかまつて居られなかつたでしょう。クロンウエルの胸中鬱勃に先づ触れたものは其夫人でなければなりません。ダーウキン夫人も名高くはありません。ダーウキンのあの沢山の著述はどうしても夫人の内助なくしてはあり得ない様に思はれます。ダーウキン夫人の名高くない所

に却て其床しい淑徳が偲ばれます。

新島刀自が偉い方であることは新島先生のおめがねになつた方であると云ふことだけで明らかであります。山本覚馬先生の令妹として、会津籠城の女丈夫として、京都女紅場の教師として、同志社女学校の舎監として、教会及諸婦人会の先達として、戦時の看護婦長として、赤十字社員として、茶の湯の宗匠としての御名声は周知のことです。又人力車上に、チャペルに、新島先生と形影相伴つて居たまふのを私共は見慣れてゐました。然し先生は愛国の士であり事業の人でありましたから、禹夫人の淋しさも想像せられぬではありません。私共は先生の内に春風の曖昧を感じましたが、只今「新島先生伝」を執筆中の師友柏木義円兄は、先生をクロンウエルに比せられる位であるから、奥様には或はクロンウエル夫人の御苦心があつたかも知れませぬ。先生は勿論「妻が妻が」と云ふ様な「洋行帰り」ではありませんでした。先生が奥様の功徳をほめたゝえられぬ裏面に、ダーウキン夫人以上の隠れたる内助の功が、ダーウキンの場合とは全く違つた方面にあつたことにはうなづかれます。殊に奥様が夜の目も閉じずに手を先生の鼻の上にかざして先生の寝息をうかがひ、常に尤も注意深き厳密なる看護の労を執られ、先生をして奥様を「三島総監」とまで呼ばしめられた奥様の御看病振りに至りては私共をして涙を催さしむるものがあります。先生が同志社の貧書生に衣を

恵みたまふた逸話は私共の屢々聞いたところでありますが、此辺に刀自の隠徳が潜んで居て、かく天恩優握にして米寿を迎へ、更に白寿に進ませらるるのではありますまいか、不束な所感を述べて祝詞に代えます。以上

加藤延年氏 ←

一八六二〜一九四五、同志社大学予科教授、地理・博物学担当、

「加藤コレクション」で有名である。



▼(三)

Dr. Mary Florence Denton's Article on Mrs. Neesima

会報61号より

It is seldom that one can write in real life of so dramatic a heroine as Mrs. Neesima. The first Christian baptism in Kyoto after more than two hundred years during which christianity was prohibited was administered to a woman who at thirty two had already been through more of adventure and seen greater changes that comes to most people whether men or women though like her they reach their 88th year. This baptism

was followed the next day by her marriage to president Neesima at Dr. Davis' house. During these fifty-six years the little school which had just been started with eight pupils has become five thousand strong and delights to honour her.

M. F. D.

註・メアリー・フローレンス・デントン女史

英国より渡来の
ピューリタンの
子孫として、一
八五七年米国ネ
バダ州生まれ。
同志社教師のゴ
ードンと出会
い、一八八七年
来日、以来六〇
年間、太平洋戦争中も帰国せず、「同志社女子
部の母」と言われた。一九四七年永眠、相国
寺長得院墓地に眠る



以上

▼(四)「女学生に傘を貸した奥様」

山岡重城氏

会報61号より

何時からとも知れず府立第一高女の生徒が、
学校付近の広い通りを雨の降る中を、又雪の
寒さに全身を真白にして震へて通る時、下駄
を切らして小女心の跣足にもなれず、途方
へた婦人が寄り添ふて来て、無言の中に傘を、

布の切れを差し出してニッコリ、「傘は明日
彼処へ」と指さす方を見れば、格子戸のある
東側の「新島」と表札のある家、門を入られ
る折に振り返って又ニッコリ。

右の手の為す事を左の手に知らすなは反
つて人によく知れるもので、御本人は忘れて
仕舞はれた時、鴨沂会から米寿のお祝ひと
あつて結構な贈り物が届けられた。以上

▼(五)四十五年前やさしい東北弁で

長坂鑿次郎氏

会報61号より

明治二十年の事だった。丁度今頃二月だ
つたらふ。満十六歳にもならぬ自分だ、同志
社普通学校にはいれないので予備校といふの
にその一月に組み込まれた、が同志社に来た
のだから一度、新島先生にお目にかかりたい
と思つてゐた。

この二月の或る日、深井英五さんが自分の
処に来て

I will take you to Mr. Neemas

と英語でいった。英五さんも自分と同年で
あつたが、一年生であつた。其の頃から英語
が上手であつた。自分は何と答へたか忘れた。
英五さんは先生と格別の関係があつたのだ。
兎に角伴れられて行つた。

玄関のドラを鳴らした。すると先生が出て
来られた。応接間に伴はれた。何と暖いので
あらふ。先生にお目にかかる緊張味と室の温

度とで汗が出た。

私は予備校の生徒で

と、やつと云つた。先生は

御名は何とおっしゃいます？

と丁寧に聞かれる。

長坂鑿次郎と申します。

其時、八重子夫人が外から帰られる、すると
先生は、夫人に向つて、全く一紳士を紹介す
る態度で

この方は此度予備校におはいいりになった。

といはれる。夫人はやさしく東北弁で
しやうですか

といはれる。若い御夫人であつたのだ。丸々と
肥つてゐられた。之がはじめて夫人にお遭ひし
た時であつた。英五さんの用も済んだので、辞
して返らうとすると、先生はあの敵かな優しい
黒い目でじつと私の顔を見て

御名前をもう一度

と仰しやる、おぼえやうとなさるのである。

御答すると

長坂鑿次郎

とくりかへしてゐられた。四十五年の昔の事
だ。以上

▼(六)「懐旧の歌」

湯浅吉郎氏

会報61号より

日本の女性で帽子を被り靴を佩いて、天
下の大道を横行闊歩して居る者は、今では何
処にでも居るが、そもそも僕等がそれを始め

て見たのは、

紅い花のつい

た帽子を被り

黒い靴を佩い

て居られた新

島八重子刀自

であった。何

でも新しい事

は我同志社か

らといふ御精

神で、天下に

率先して御実

行なされたの

のであらう。そこで、

めづらしと誰か見ざらん世の中の

「一寸伺いますが、ここに天の父はその日を

悪しき者の上にも善き者の上にも昇らせとあ

ります、猶太では日は何方から出ますか」。

「やはり東からです」。「ああさうですか」。

「ここにイエス涙をながしたまふとあります

が、イエスは笑ったことありますか」。「そ

れは記してありませんが、子供がそばに来た

とありますから、イエスはお笑ひになつてゐ

たでせう」。

これが聖書の教室に於ける僕等の問答であ

った。そして聖書は僕等の正科であつて毎期

他の普通学科と同じ様に試験があつたのであ

る。此の試験の時には新島先生の御夫婦が必

ず御出席になり、試験がすむと「皆さん今



湯浅吉郎氏 (号半月) →

一八五八〜一九四三、安中に生

まれ同志社教授・京都府立図書

長など歴任、旧約聖書研究

夕は何もありませんが、餅をおあがりいら

つしやつて下さい」と仰しやるのであつた。

八重子婦人の此の一声を聞かんが為に平常

聖書嫌ひな奴までが、この試験に出て来たの

であつた。つまり餅に釣られた奴も居たので

あつた。そこでその晩は先生のお宅へぞろぞ

ろ出かけて大きな餅の二切入の「しるこ」や

雑煮を五六杯、中には十杯に及んだ者もあつ

たので、先生御夫婦の外に、その老父母や姉

君も居られて、一家大笑ひとなつて喜ばれた

のであつた。しかし僕は近頃の八重子刀自に

は御目にかゝらず、久しく御無沙汰して居る

僕の眼中に浮ぶその面影は花嫁時代のそれで

あるから、そこで

食ふ餅に驚かれたる花嫁の

米の祝をいはふ今日かな

新島先生はいつも御多忙であらせられた

が、それでも物理学を御受持になられたこと

があつて、僕等はその教授を親しく受けたの

であつた。また先生の説教は数度拝聴したが、

それを筆記しておかなかつたことは、今思へ

ば残念至極である。けれども先生の説教は涙

の説教であつて、凡筆の及ぶものではなかつ

た。めつたに先生は^{ひとり}で御散歩なさる事は

なく、何時も八重子婦人と御同伴であつた。

僕等はそれをみて仲が好いナーと思つてゐ

た。それで此度八重子刀自の米寿の祝に際し、

先生を思はずにはゐられない。そこで

▼(七) 宗竹刀自賀米寿頌 千宗室氏

会報61号より

以上

新島八重子刀自は我が方の先代円能齋の未

だ壮年時代から入門されまして、専ら茶道に

後半生を捧げられた当門女流中の最高齢者で

あります。

襄先生御他界後、孤身能く時流を凌いで悠

々天命に楽しんでゐられる御清尚は、既に其妙

齢の頃、風にもいたむ^{かたわ}繊弱い女性の身を以て

父君に代り、血氣の壮士と共に^{ぼしん}戊辰の役に

参加して堂々男子を驚嘆せしめられた如き^き氣

魄を掲げられた^{きりん}氣凜が、襄先生の御高風に

醇化せられ、一面茶道の要諦を窮めて超世間

的な風尚を鍊磨された人格の然らしめたもの

であつて、我茶道界にも稀に見る風格を備え

四十幾年來^う倦む処もなく、我^{わが}今日庵に温か

い情誼を寄せられてゐることは、家元として

頗る感謝に堪えない処であります。

凡そ古い人も沢山ゐられ、専念茶道に執

心して多年今日庵と密接な關係を持続してゐ

る人も^{すく}尠なくはありますが、刀自^{とじ}の如き

は亦^{まれ}稀であります。

この宗竹女史が本年は目出度米寿の春を迎

えられたのでありますが、昨年末御病患のこ

とを耳にして内々深く痛心してゐました。然

るに当庵に於ける恒例の本年の初釜式には相

変わらず旧誼を捨てず御出席下さつたことは、

懐かしい慈母に会ったやうで非常に欣幸に堪えませんでした。と共に女史の健康の御回復を衷心お喜び申上げた次第でありました。希くば更に御自重の上、今後益々息災に天寿を保たれんことを祈ると共に、玉椿の八千代、千代万代の末かけて、八十八媪のために栄光あれと、爰に賀頌を呈する次第であります。

千代かけて節をみたさぬ呉竹の

ふかきみどりは世々に栄えん

以上

（以下は「同志社校友同窓会報」第66号

「敬弔」より）

▼（八）新島八重子刀自 山室軍平氏

（社葬に於ける追悼説教の概要）

諸君、新島八重子刀自の葬儀に説教することと就ては、或は別に私よりも適任の人があったかもしれませんが、私は故人の遺志に由つて、その務を行ふに至りましたことを、光栄の至と存じます。

明治二十二年の秋、私は新島先生を慕ふて、来つて同志社に入学することとなりました。然るに数ヶ月の後、即ち翌二十三年正月、先生は早く世に亡き人となられました。当時私は最下級の予備学校生徒でありましたが、先

生を哀惜するの余り同級生と謀うて一つの会を組織し、先生に親炙した人々を代る々々来て戴いて、先生に關する逸事逸話を聴聞することとなりました。多分九回か十回か、この種の会合を催したと思ひます。（中略）右の会合を開催中、若し出来るならば新島夫人にも御来会を願ふて、先生の逸事逸話を等も承りたい所であつたが、さうも参りかねるので、私は予備学校の生徒を代表して、夫人を丸太町の御宅にお訪ね申したのである。すると夫人は先生の事よりも寧ろ多く、夫人自らの閱歴を語り、会津の籠城のことから、さては白虎隊の話など語り聞かせられました。（中略）

夫人は明

←山室軍平氏



治十九年一月、受洗してクリスチャンとなりました。之は京都で受洗した人の初であつた 一八七二〜一九四〇、岡山県と承知して居 生まれ。日本救世軍中將と

ります。私が て活躍「平民の福音」発行

京都に来たのは明治二十二年で、その翌年又翌々年の頃は、所謂「耶穌退治」の演説が尚盛に行われて居り、現に其の頃 四条のある劇場にて催された基督教大演説会には、乱妨人が大騒ぎをして、終に血を流すに至つた

有様を、今も目に見るやうに憶えて居ります。然るにそれから十四五年も前の明治九年一月、しかも京都市中、誰よりも一番先に夫人が受洗してクリスチャンとなられたといふのは、もとより新島先生の感化にも由つたであろう。又其の令兄山本覺馬氏の奨励にも由つたであろう。然し乍ら彼女の勇敢なる決意を以てするに非ざれば、到底出来ない事であつたに相異ありません。彼女は会津籠城中に發揮したと同じ女丈夫の精神を以て、基督教を受容したのであらうと考えます。

熊谷直実は当時知られた武勇の士であつたが、一旦発心して仏門に入るや、又同じ勇敢心を其の信仰生活に現しました。彼の歌に、浄土にも剛の者とや沙汰すらむ

西に向ひて後見せねば

とあるのはそれです。新島夫人のことが、亦聊それと似通ふ所があつたのではないでせうか。私は思ふ、彼女は会津籠城中、四面楚歌の声を聞きつつ、それでも最後迄、勇敢に立働いたと同じ精神を以て、当時は未だ四面皆敵ともいふべき境遇にあつた基督教に身を投じ、大胆に基督の側に属した者と考へるのであります。（中略）

彼女は十四年の結婚生活の後、四十余年間寡婦としての生活を営まれました。その間、日清戦争には、京都赤十字社支部囑託として二十人の看護婦を引率して広島に行かれたやうなことがあり、日露戦役には又同様、大阪予備病院に出張せられたやうなこともありま

した。之は二十四歳の当時、会津城中に試みられたと似たやうなことを、再応繰返されたものに過ぎません。只其の異なる所は、前には会津一藩の為に尽したことを、この度は日本帝国の為に尽された一点にあつたのであります。晩年に及んで夫人は深く茶道に入られたよ由承りますけれど、不幸にして茶道のことは私にはよく解りません。何でも之に由つて修養上、大に得る所があられたと承知しておるのであります。(中略)

一昨年、太平洋沿岸の米国にあつて、新島夫人が仏門に入られたといふ報道が、彼の国にて発行せらるる邦字新聞に出たのを見ました。在留同胞の中には、之を見て頗る思ひ惑ふた者もありましたが、私は一も二もなく、之を否定したのであります。「此は屹度何かの間違ひであります」と云ふておいて、帰朝して後、果してそれが只、建仁寺の黙雷和尚と茶友としての交際をせられたことを、か訛伝せられたものであつたことを知つたのであります。夫人は決して、其の基督に対する節操を二三にする如き人ではなかつたのであります。

られました。しかる後、「もはや大概御用も済んだことと思ひ、召さるゝ日を待つて居りますが、未だその御声に接しません」と、まるで熟した果物が、手に触るゝのを待つて落ちんとするが如く、何等執着する所なく、只管天国の榮を望んでおらるゝ有様に敬服したのであります。

「この故に我らは常に心強し。かつ身におけるうちは、主より離れるを知る。見ゆる所によらず、信仰によりて歩めばなり、斯く心強し。願ふところは、寧ろ身を離れて主と偕に居らんことなり。然れば身に居るも、身を離るゝも、ただ御心に適はんことを力む」(コリント後書五章六く九)とあるのは、全く新島夫人の最後の信仰又心事であつたと思ふのであります。彼女をして此の如き生活を全うせしめ給ふた神を讚美し、其の遺族縁戚の方々の上に、此の際神の御慰の豊ならんことを祈ります。神が会葬者一同を恵み給はんことを祈る。又神が同志社を恵み給はんことを祈る。以上

▼(九) 弔辞 同志社女子学生生徒

代表 鈴木満佐子氏

会報66号より

私共の校祖新島先生未亡人八重子刀自には昨年来の御いたつきが一度はうすらぎ 春たつ頃は御快きおかほを拝して居りましたのに夏まだ浅き去る十四日の夕 八十八歳の御高

齢をもつて御永眠遊ばされた御ことども耳に致しました 私共一同心から哀悼の念に堪えぬ次第で御座います

承りますれば 刀自は維新のころ武士道の最後の花を咲かした会津の由緒ある武士の家にお生れになり やさしくをゝしい昔ながらのさむらひの娘としての御教養をうけられしとか 時代の先覚者新島先生の御夫人となられてからは 一意我国の子女教育の道を開拓されたかづかづの御業績 こゝにいまさらながらお偲び申し上げる次第でございます 同志社創立てふ至難な業を御敢行になつた校祖をしのびまつるとき 私共はその蔭に未亡人の御内助忘れ得ません 私共は再びまみえまつる事の出来ぬ悲しみを思ひながらも 総てが神の御摂理である事をおもはせられるのでございます 幽冥境を異にしたまふとはいへ校祖御夫妻が尚々育ちゆく同志社をとこ世のてに守りたまふことをこころにとゞめつゝ 御夫婦のかたみなるこのまなびやをもりたてゝ行きたいと存じます 風かほる若王子山頭のおくつきにとこしへの平安のあらんことを祈りつゝ一言もつて弔辞といたします 以上

▼(十) 日本赤十字社社長・正二位勲一等公爵

徳川家達氏

会報66号より

日本赤十四社特別社員勲六等新島八重氏逝

去セラル 氏ハ本社博愛ノ主旨ヲ協賛シ 明治三十年六月篤志看護婦人会京都支部幹事囑託以来 其ノ職ニ在ルコト九年 傍 看護学助教ヲ兼ネ社業ニ尽力セラレタル功勞ニ依リ特別社員ニ推薦セラレ 特ニ日清日露ノ兩大戦役ニ際シ看護婦監督トシテ親シク予備病院ニ出張シ傷病將士ノ救護ニ尽瘁シ功績顯著ナルヲ以テ勲六等ニ叙セラレタルハ本社ノ深ク感謝スル所ナリ 今ヤ訃音ニ接シ 惋惜ノ至リニ堪ヘス

總裁戴仁觀王殿下ノ御沙汰ニ依リ茲ニ恭シク弔辞ヲ呈ス 以上

▼(十一) 日本赤十字社篤志看護婦人会

京都支部会長 横山須磨子氏

会報66号より

同志社創立者新島襄先生未亡人八重子刀自八十八歳の高齡を以て遠逝せらる嗚呼哀哉

刀自は夙に赤十字主義を協賛し夫君没後専ら奉公の事業に志し 偶々日清戦役勃発するや看護婦監督に推され全志二十名を引率して広島へ出張し四ヶ月間救護に尽瘁し 後年日露戦役に際しては篤志看護婦を統督して大阪予備病院へ出張すること二回 傷病將士の看護に励精せられたる功勞顯著にして勲六等宝冠章を授与せらる 此間幹事並に看護学助教として会務を 執掌 すること九年 功に依り特に特別社員に推薦せらる 刀自の如きは真にナイチンゲール嬢の主義を汲み 婦人に

して報国の大義を果し範を後進に示したるものと謂ふべし 然るに今や幽明境を異にし再慈顔に接する能はず 洵に痛悼の至りに堪へず 仍りて茲に会員一同を代表して謹みて弔詞を捧ぐ 以上

▼(十二) 京都会津会代表 新城新蔵氏

会報66号より

新島八重子刀自 身退り給へり 噫呼 八十あまり八つの高き齡にて新島八重子刀自は永き

眠に就き給へり 真にいたましも痛ましく ち惜しとも口惜し 刀自は旧藩上士の家に生まれ 幼きをりは砲術師範の子女として庭訓を受け 特に我が国先覚の偉人兄君山本覚馬先生の感化を受けられたる事 尠からず 二十あまり四つの年 戊辰の戦役に遭ひ 具さに籠城の苦を嘗め健気に勇ましき活動をなし給ひ よはい漸く盛なる頃 京都府立第一高等女学校の前身たる女紅場の舎長兼教導試補として育英の事に尽され 新島襄先生に嫁ぎ給ふや琴瑟相和し よく内助の効を致され 背の君の信と愛とを一身にあつめ給ひしを結婚生活二十年に満たず 不幸背の君に後れ給ひしよりは もはら国の為世の為人の為の奉仕に心身を委ね そのいさをしによりて勲六等宝冠章をさへ賜りぬいとまあれば茶道をたしなみ 心閑に年月をおくりたまひ 八十に余りても尚ほ壯の者も及ばぬ元氣におはし 往にし年 旧藩公の姫君秩父宮妃殿下に定まら

せ給ひしをりなど 付添の人をも伴はで東京に出で逸早く御よろこびの辞を上られしなど 年若きをのこも女もただ刀自にあやかり 尚幾十年も永く刀自の優しき心に抱かれ いくしみ深き面影を親しく仰がむものと祈みたる効もなく 俄に今日の悲しき日にあひぬること 痛ましも痛ましく 口惜しとも口惜し さはれ刀自の御靈はこよなく敬ひ慕ひまつる人々数多こゝに集ひて おのおのおの誠心を捧げまつり 誅び奉ることの葉をあはれと きこしめせと謹みてまをす 以上

新島学園収蔵史料調査整理

ボランティアメンバー

- 淡路 博和 2期
- 白石 幸晴 9期
- 小坂橋 治徳 11期
- 清水 博 11期
- 真下 正雄 15期

問合せ先 淡路 博和

awaji@sep.emil.ne.jp

夢故園花学園収蔵史料紹介誌

第五号 (非売)

発行日 二〇二一年十月二〇日

編集 秋池 いづみ

新島学園教諭

発行 淡路 博和

印刷 新島 学園

